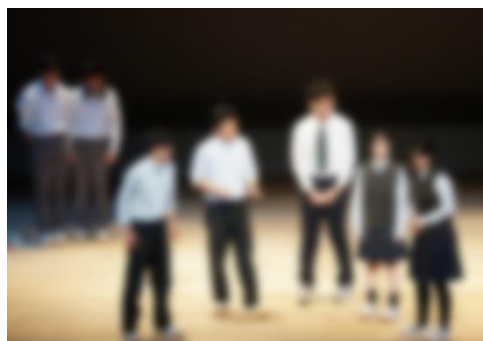


第74回全道高等学校演劇発表大会 in 小樽「運河きらめくオタルナイ大会」

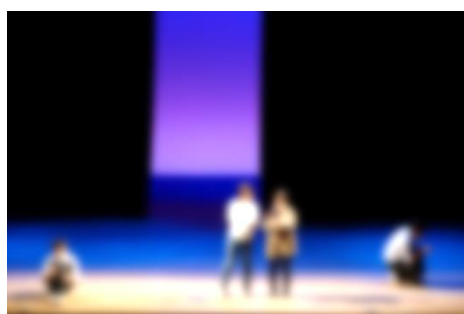
上演番号 14 番 北海道富良野高等学校（上川支部）

「オヤツじゃないのよバナナは」 作：富良野高校演劇部

（実際に統合となる自校を踏まえ）高校統合によって新たに活動することになった2つの高校の演劇部の部室獲得をめぐるドタバタ劇であった。冒頭に高校統合までに至る歴史過程を擬人化した劇で提示してくれたことにより、わかりやすく劇に入り込むことができた。幹太・蓮也のコミカルさと千桜・彩花・斉藤の悪賢いしなやかさに凸凹感があったところや、演者が客席に來たり舞台上をドタバタと走り回ったり、素舞台だからこそその自由さを感じられたところが面白かった。



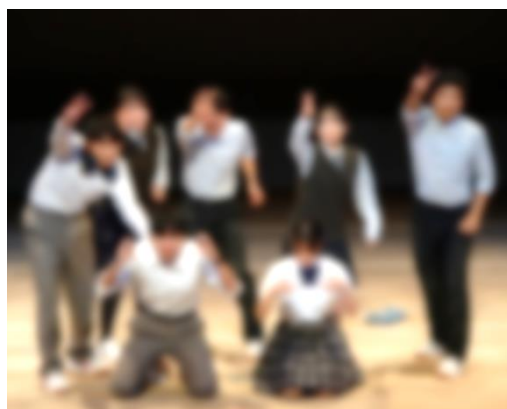
いろんな部屋を素早い照明で表現するところはコメディだから許される使い方であったと考えられる。回想の場面では奥の幕から人物が出たり入ったりすることで、記憶の狭間から出てきたよう



に感じられてわかりやすかった。さらにホリゾントの色を紫っぽくすることで、思考の印象付けをしているのではないかと考えた。また男性陣が鬼頭先生にボコボコにされるシーンをあえて袖幕でやることで、“今こうなってるんだろうな”と観客に想像させる工夫を感じた。そこに見えていない人物の存在を感じさせる表現が巧みであり、キャラを想像することができた。

人数の多いほうに流されていたアサヒ総合高校の斉藤が、最後にエチュードで「先輩と全道に行きたかった」と自分の想い語るシーンは共感しやすかった。ほかにも、幹太が審査員の指摘を引きずっているのが印象的で、せつかく作った装置を捨てないといけない辛さが心に響いた。裏方の苦しさや役者のような華やかさが無い寂しさが共感できて一緒に寂しくなった。

統合とともに愛した演劇部がなくなるとしたら、自分たちはどう思うだろうか。講評委員は斉藤の立場になって考えてみた。伝統が理不尽に潰され、違うものに置き換えられ、先輩が積み上げたものが一気に崩れ去るイメージが湧き、素直に受け入れられないという意見が出た。また「なんで私だけ？」と妬みの感情や部活が残らないことに対する悲しさで現実から目をそむけたい気持ちが強くなるのではないかと意見も出た。しかし斉藤は、しっかり現実と向き合っていて尊敬した。



シリアス・コメディ・ドラマ性がバランスよく混在しており、高揚感を覚え満足できた物語だった。